

磐城山遺跡(4次)説明会資料

調査原因	農地改良工事に伴う埋蔵文化財の記録保存
調査期間	平成 23 年 4 月 4 日～9 月頃 (予定)
調査面積	315 m ² (予定)
調査主体	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館

1 はじめに

磐城山 (ばんじょうざん) 遺跡は、鈴鹿川左岸に広がる標高 35m前後の丘陵上に位置します。この丘陵は遺跡の密集する場所として知られており、青谷遺跡、扇広 (おぎぶる) 遺跡、寺山遺跡、中尾山遺跡、沖ノ坂遺跡、一反通 (いったんどおり) 遺跡など、数多くの弥生時代の遺跡が所在しています。特に弥生時代の遺跡は竪穴住居 (たてあなじゅうきょ) を中心とした集落跡で、南側の鈴鹿川を望むような丘陵先端の平坦部に広がっているようです。反対に丘陵の北側へと進むと、国分寺や国分尼寺といった奈良時代以降の遺跡が多くなる傾向があります。

磐城山遺跡は、これまでに三重県が 1 回、鈴鹿市が 3 回 (1～3 次) ほど発掘調査しています。三重県の調査は、1993 年に四日市鈴鹿環状線の工事に先立って行われたものです。その調査場所は遺跡の東の端にあたり、約 1,100 m²と比較的広く調査しましたが、竪穴住居は 3 棟が見つかった程度でした。

鈴鹿市の 1 回目と 2 回目の調査 (1・2 次) は、1997～1999 年にかけて行った市道木田 325 号線道路改良工事に先立つものになります。この時は、あわせて約 5,000 m²と広い範囲を調査しました。調査した部分が遺跡の中心にあたるようで、弥生時代後期と古墳時代後期の集落が大規模に広がっていることが確認されました。また、奈良時代頃の掘立柱建物 (ほったてばしらたてもの) や鎌倉時代から室町時代の木田城に関わる堀状の溝など、様々な時代の痕跡も数多く確認され、磐城山遺跡が長く利用されてきたことが分かりました。しかし、広い範囲を急ピッチで調査したため、現在はその時に出土した大量の土器の整理作業に追われています。

磐城山遺跡は、その後はしばらく発掘調査されることがありませんでしたが、昨年度に 3 回目の調査を行いました。農地改良工事の前にしたもので、約 740 m²を調査しています。1・2 次調査と同じく、竪穴住居が多数見つかりました。弥生時代後期と古墳時代後期の集落が更に北側まで広がっていることが分かってきました。

2 見つかった遺構 (いこう)

溝や柱穴が多数見つかりました。あまりにも重複するため、いくつあるのか数えることが難しいほどです。もちろん、排水用の溝などもありますが、これらの溝や柱穴の多くは、組み合わさって堅穴住居となります。

磐城山遺跡で見つかった弥生時代後期～古墳時代の堅穴住居跡は、1辺4～7mの正方形や長方形で、深さ数10cmほど掘り込んだ半地下式の建物です。掘り込んだ壁の周りに溝を掘ります。これは周壁溝(しゅうへきこう)と呼ばれ、排水用とされています。屋根は主に4本柱の主柱穴(しゅちゅうけつ)で支えており、その柱の真ん中あたりに地床炉(じしょうろ)と呼ぶ火どころを持ちます。古墳時代後期頃になると朝鮮半島からカマドが伝来し、火どころの位置が壁際へ移動しますが、磐城山遺跡ではそのような例は少なく、カマドは本格的に導入されていなかったようです。

今回の4次調査では、堅穴住居16棟以上を確認しています。現在も継続中であるため、さらに増えることが予想されますが、弥生時代の後期前葉が2棟、後期中葉～後葉10棟以上、古墳時代後期4棟が確認できました。他にも飛鳥～奈良時代頃の溝や鎌倉～室町時代の溝なども見つかっています。

3 出土した遺物 (いぶつ)

7月末までにコンテナケースに40箱も出土しています。多くは破片となったものですが、中には完全な形にまで復原できるものもあります。弥生土器がほとんどですが、古墳時代以降の土師器(はじき)や須恵器(すえき)の他に、磨製石斧(ませいせきふ)や砥石(といし)などの石器も出土しています。

今回の4次調査で出土した遺物は、これから整理して来年の3月22日(木)から6月24日(日)まで、考古博物館で開催される「速報展 発掘された鈴鹿2011」で展示する予定になっています。

弥生土器(やよいどき) …今回見つかった弥生時代後期の土器は、今から1,800年～2,000年くらい前の、軟質で素焼きの土器です。壺・甕・高杯が代表的な形です。

壺(つぼ) ……胴が丸く、くびがすぼまり、口が広がる容器。米などを貯蔵したと考えられています。

甕(かめ) ……球形に近い胴の上でくびがすぼまり、大きく口が広がる容器。煮炊きに用いたと考えられています。

高杯(たかつき) …鉢や椀、皿形の器に長手の台脚がついた容器。食べ物を盛り付けていたと考えられています。

土師器(はじき) …今回見つかった土師器は、古墳時代のものが中心です。今から1,500年くらい前のもので、弥生土器から発展した、軟質で素焼きの土器です。甕が多く出土しています。

須恵器（すえき）・・・今回見つかった古墳時代後期の須恵器は、今から 1500 年くらい前の硬質で、窯焼きの土器です。ロクロで成形し、登り窯で焼くなど、朝鮮半島から伝わった作り方をしています。杯や壺、皿、鉢などが代表的な形です。

杯（つき）・・・椀よりも大型で浅く、皿よりも深い容器。食べ物を盛り付けていたと考えられています。

磨製石斧（ませいせきふ）・・・磨いて作った石の斧（おの）です。木を伐採したり、加工する時に使われたと考えられています。主に縄文時代から弥生時代まで使われました。

4 調査の成果

磐城山遺跡はこれまでに 5 回にわたって、合計 7,000 m²が発掘調査されてきました。広い面積を調査していますが、磐城山遺跡は 43,000 m²が登録されているので、未だ全体の 16%しか確認されていない現状です。そのため磐城山遺跡の全体を説明することはできませんが、これまでの調査によって遺跡の東側の様子がだいたい分かってきました。

弥生時代後期には、現在の木田町の信号機があるあたりに環濠（かんごう）と呼ばれる、集落を囲い込むような大きな溝（幅 2.5m程度）が確認されています。他の遺跡では二重、三重の溝で集落を囲んだ例もありますが、磐城山遺跡では一本の溝のみのようです。しかも、丘陵の先端を寸断するような方向にのびているので、集落を囲いこむかどうかは疑問があります。今後、北側の調査が進展すればはっきりしてくると思いますが、この環濠によって集落が区画されていたことは確かでしょう。環濠に区画された西側には、環濠と同じ時期の土器が使われた竪穴住居が多く見つかっています。ほぼ同じ場所で何度も建て替えながら、長くこの地で生活している様子うかがえます。

これまでの調査では、磐城山遺跡は弥生時代後期後半の山中式（やまなかしき）頃に遺跡ができはじめたと思われていました。しかし、今回の 4 次調査によって、それよりも 100 年くらい前の弥生時代後期前半の八王子古宮式（はちおうじふるみやしき）まで古くなることが明らかになりつつあります。このころの集落は他に例が少なく、大変貴重な成果だといえます。なお、この時期から環濠に区画された集落であったのかは、もう一度検討し直す必要が出てきました。今後の課題の一つです。

その後の古墳時代に入ると、磐城山遺跡から人々の痕跡が少なくなります。反対に、鈴鹿川の流域にある八重垣神社（やえがきじんじや）遺跡や十宮古里（とみやふるさと）遺跡などで多く見つかるようになり、人々の活動場所が標高の低い場所に移っていったと考えられます。再び磐城山遺跡に人々が戻ってくるのは、5 世紀終わりから 6 世紀のはじめの古墳時代後期に入ったころのようです。この時期も竪穴住居跡が多数見付き、また集落として使われるようになったことがうかがえます。

その後の飛鳥・奈良時代においても、掘立柱建物等が多数見つかり、ある程度継続して利用されていくようです。現在、注目しているのは4次調査区の西側を南北に真っ直ぐのびている溝です。1・3・4次調査にまたがって確認されている溝ですが、あわせて28mが確認され、さらに北へと続いています。1次調査区では、ちょうど西側に直角に折れ曲がりさらに60m以上のびていることが確認されています。出土する土器に恵まれていないのが残念ですが、破片となった資料を観察していると、飛鳥～奈良時代頃に掘られた溝のようです。このころは直線的な土木工事が好まれた時代で、各地で官営施設や古代道路などが整備されていく時代です。溝の掘り方も断面が逆台形ですっきりしたものです。このような溝を見てしまうと、溝で四角に囲まれた中に、何らかの重要な建物などがあったのではないかと想像してしまいます。

この木田町は古代の『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）』によると、河曲（かわわ）郡駅家（うまや）郷だと考えられています。駅家というのは、古代律令制度によって定められた施設のことです。古代の幹線道路である駅路（えきろ）を行き来する人に対して、馬の乗り継ぎや食料の供給、宿泊所の提供などをするために、30里（約16km）ごとに作られました。山陽道の布勢（ふせ）駅家とされている兵庫県小犬丸遺跡では中心部に80m四方に限られた区画があり、この磐城山遺跡の溝もそういったものである可能性もあります。他にも、現在の河曲郡衙（かわわぐんが）は狐塚（きつねづか）遺跡だと考えられていますが、この磐城山遺跡にその前の時期の郡衙があり、後に狐塚遺跡に移ったと考えることもできます。あるいは、それらを後ろで支えた古代豪族の大鹿（おおか）氏などの居館があったのかもしれない。

いずれにしても、その中心部分は今回の調査区の西側にありますので、今の段階ではまだ何も証拠がありません。今後調査が進むと徐々に解明されると思います。さきの想像もただの空想で終わってしまうかもしれませんが、磐城山遺跡は色々な歴史をはらんでいる興味深い遺跡だといえます。



写真1 溝掘削中の出土遺物

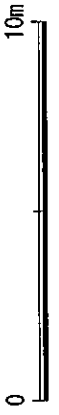


写真2 暗渠（あんきょ）の様子

第4次調査区

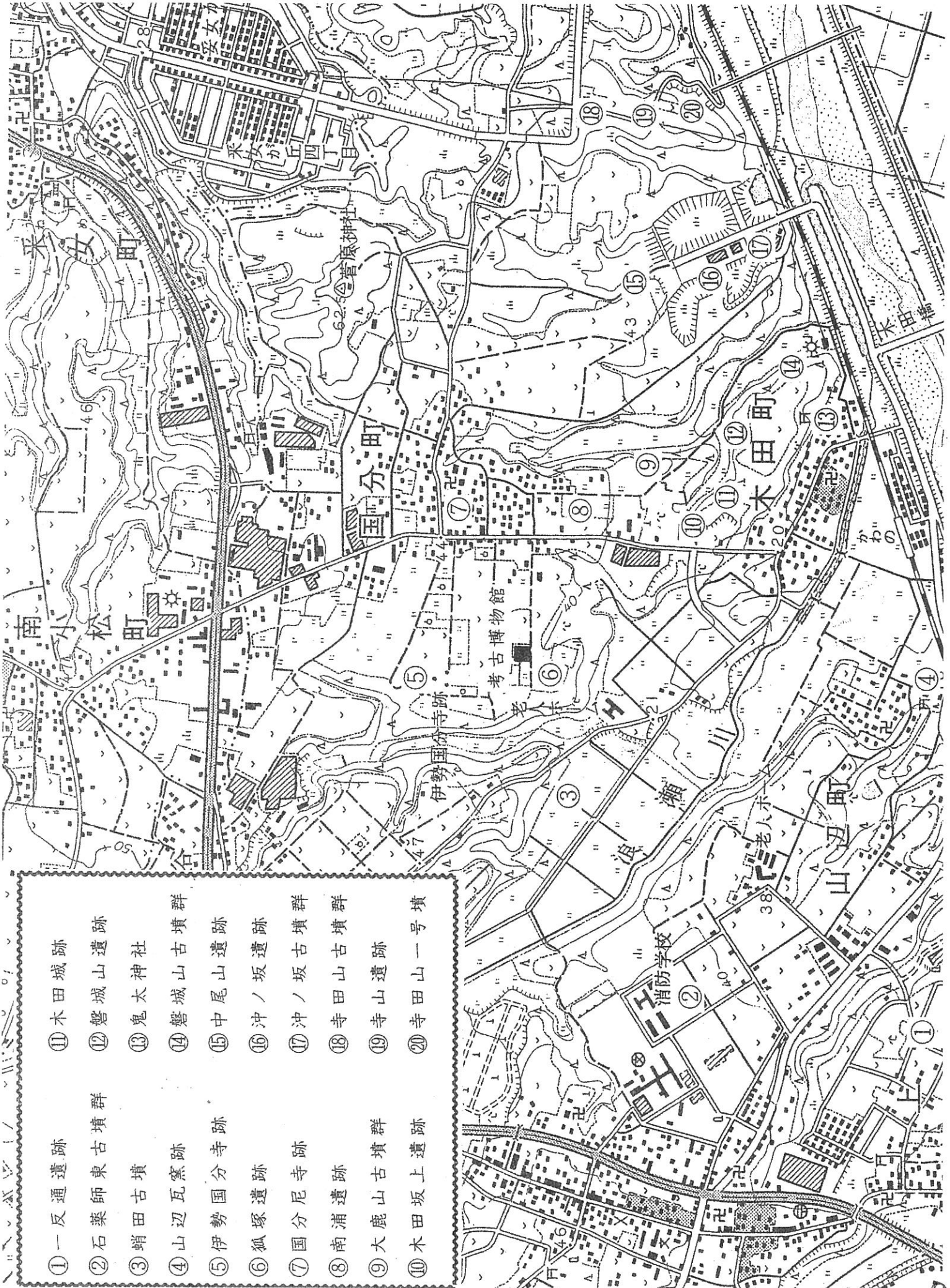


第3次調査区



遺構配置図 (S=1/200)

磐城山遺跡周辺の代表的な遺跡



- | | |
|-----------|-----------|
| ① 一通遺跡 | ⑪ 木田城跡 |
| ② 石薬師東古墳群 | ⑫ 磐城山遺跡 |
| ③ 蛸田古墳 | ⑬ 鬼太神社 |
| ④ 山辺瓦窯跡 | ⑭ 磐城山古墳群 |
| ⑤ 伊勢国分寺跡 | ⑮ 中尾山遺跡 |
| ⑥ 狐塚遺跡 | ⑯ 沖ノ坂遺跡 |
| ⑦ 国分尼寺跡 | ⑰ 沖ノ坂古墳群 |
| ⑧ 南浦遺跡 | ⑱ 寺田山古墳群 |
| ⑨ 大鹿山古墳群 | ⑲ 寺山遺跡 |
| ⑩ 木田坂上遺跡 | ⑳ 寺田山一ノ号墳 |